

## 北朝鮮出張記

ERINA調査研究部研究主任 三村光弘

2007年7月19日～8月4日の間、北朝鮮を訪問した。今回は、平壤と江原道の元山、侍中湖、安辺郡および白頭山を訪問した。

### 新潟発ウラジオストク経由平壤航路

7月19日、新潟からウラジオストク経由で平壤に向かう。このルートは、日本から北朝鮮に向かうルート（大きく分けて北京経由、瀋陽経由、ウラジオストク経由がある）の中で、所要時間が最も短いルートである。新潟を毎週木曜日の15時50分に出発すると、ウラジオストクに19時30分に到着し、1時間10分の待ち時間の後、20時40分にウラジオストクを出発し、平壤には20時20分（いずれも現地時間）に到着する。合計所要時間が4時間30分と、非常に楽なルートだ。北朝鮮のビザは、事前に朝鮮総連系の中外旅行社に申請すると、ナホトカ総領事館からのビザ配達サービスを受けられる。ただし現在のところ、日本国籍保持者のビザ配達サービスの利用は、書類の郵送時間などの事務的な都合により、出発のかなり前に申請が必要であるなど、かなり難しくなっている。

新潟空港には、出発の1時間10分前に到着した。チェックイン締切は出発の40分前なので、30分ほど余裕がある。チケットとパスポートを見せて、荷物のセキュリティチェックを受ける。普通はそのままチェックインカウンターでチェックインを行うのだが、毎週木曜日のウラジオストク行きのチェックイン時には、税関職員が北朝鮮に向けて出国する乗客のみを抽出して荷物検査を行うことになっている。そのため、平壤まで行くと申告した旅客は、臨時に開設された税関検査台で荷物検査を受けることになる。この税関検査については、合法的なものなので、拒否すると荷物を国外に搬出できなくなる。なぜ北朝鮮に行く旅客に対してのみ、このような検査をするのか質問したところ「国策である」との返答があった。検査自体はそれほど時間がかかるわけでもなく（10分ほど）、段ボール箱の再梱包の手際もよく、係官の対応も親切であったが、あまり実効性のある検査でもない（税関検査の際が終わった後、2階に上がれば行動は監視されない。また、新潟～ウラジオストク～平壤、関西～瀋陽～平壤以外のルートではこのような検査を行わない）ので、北朝鮮に行く旅行者に対しての国の不快感を伝えるための手段であるという印象を与える結果となっていたのが残念であった。

税関検査を終えた後、チェックインを行う。平壤までスルーチェックインが可能である。チェックインを終えたら、もう出発の45分前であった。2階の出国検査場へと向かう。ここでの検査は通常通りである。出国の確認を受けて、3階の出国待合室へと向かうと、すぐに搭乗が始まった。

ウラジオストク行きの飛行機は、ウラジオストク航空のツポレフ154-M型機であった。以前は、新型機であるツポレフ204機が就航していたのだが、いつの間にか旧型機に戻っていた。この日乗った機体は、以前は中国の航空会社で使われていたようで、機内設備の説明に漢字が残っていた。出発までの間、冷気を送り込む装置が付いていないので、機内は蒸し風呂状態であった。

新潟からウラジオストクまでは1時間40分、空中にいるのは1時間20分ほどである。途中、簡単な機内食（といっても、ビールやワインのおつまみ程度）が出る。提供されるビールやワインは割合美味しい。このあたりはヨーロッパの航空会社だと思う。到着後、タラップで飛行機を降りる。到着しても乗客が通路に殺到しないところがロシアのいいところだ。韓国の市内バスの中古とおぼしきバスに乗り、ターミナルに向かう。ターミナルの1階から、2階のトランジットルームに上がる階段の踊り場で、乗り継ぎ手続を行う。この日、新潟から平壤へ向かう乗客は、私を含めて3人であった。

トランジットルーム（というか搭乗待合室）には、ウラジオストクから平壤に向かう乗客がすでに集まっていた。そのほとんどが北朝鮮の人々だ。出発時刻よりもずいぶん前に搭乗開始のアナウンスがあり、韓国製のバスで飛行機に向かう。ウラジオストクから先は、高麗航空のツポレフ134型機である。この飛行機も駐機中に冷風を送る機械が付いていないので暑い。ウラジオストクの気温はそれほど高くなかった。我慢できないほどではなかった。機内で北朝鮮のビザを受け取り、出発を待つ。結局、定刻よりも30分ほど早く出発した。

ウラジオストクから平壤までは、所要時間1時間40分、途中ハンバーガーの機内食が配られた。日の長い時期なので、夕暮れの中を飛行機は飛んでいく。日本海（東海）沿岸を咸興あたりまで飛び、内陸部へと入っていく。読書をしているうちに飛行機は、北倉の火力発電所を左に見て高度を下げていく。しばらくして、平壤の順安国際空港に着陸した。順安空港は、滑走路からターミナルが離れているので、着陸後10分ほど地上を走る。駐機場に到着後、タラップで飛行機を降りる。日本製のバスでターミナルに向かう。

## 元山、侍中湖、安辺郡泉三協同農場見学

今回の滞在中、1泊2日で江原道を訪問する機会があった。訪問したのは、元山市、侍中湖（通川郡）、安辺郡にある泉三協同農場であった。7月22日の朝、平壤のホテルを出発する。日曜日は一般車両の通行が制限されているので、道路は空いており、歩行者や自転車が車道にも出てきている。道路が空いているからといってスピードを出しすぎると危険である。平壤市内から、開城へ向かう高速道路を通り、元山へ向かう高速道路へと分岐する。東明王陵へ向かう道路が分岐するところまではアスファルト舗装だが、それ以降は元山までコンクリート舗装の道が続く。途中、新坪休憩所で休憩して、元山に向かう。元山の手前で、1つのトンネルが工事中であったため、トンネル手前で少し停車してから、工事中のトンネルを通行させてもらった。現場では、湧水が道路に落ちないように二重壁の工事をしていた。人民軍の若い兵士たちが整然と作業にあたっていた。軍が国民生活に直接サービスする北朝鮮の現状を見ることができた瞬間であった。



写真1 元山市内を走る自転車



写真2 元山市内の簡易売店（屋台）

昼食を取るために元山市内の松濤園ホテルに向かう。このホテルは万景峰 - 92号が着岸する元山港にほど近いところにある。市内では、写真1のように、他の地方都市と同じく日本製の中古自転車が多く見られた。舞鶴から積み出

されたものが多いのか、その多くは京都周辺の防犯登録のシールが貼られたものが多かった。市内には、写真2のような簡易売店も多く見られた。また、真新しい看板の食堂がいくつかできているのも見かけた。

昼食後、宿舎の侍中湖ホテルに向かう。侍中湖は元山と金剛山のほぼ中間に位置する名勝地である。湖と海水浴場があるリゾート地で、平壤の高麗ホテルの支店がある。ホテルにチェックイン後、海水浴に向かった。海水浴場には、写真3のように、日本で言えば海の家にあたるような食堂や脱衣室を備えた建物があり、設備は割合よかった。ただし、ここでの支払いはそれほど高くないものの外貨であり、お金のある人でないと来れないのではないかと思った。お客は多かったが、中国人など外国人よりは国内の人々が多かった。



写真3 侍中湖海水浴場の海の家でくつろぐ人々



写真4 河原に植えられたトウモロコシ

翌朝、ホテルを出発し安辺郡泉三協同農場へと向かった。途中、農村地帯を通ったが、米作とトウモロコシ作が主体であった。畦道や水田の周辺には大豆が多く植えられていた。写真4はその途中で見た河原に植えられたトウモロコシである。

協同農場は、モデル農場とのことで、田畑は整然としており、協同農場の中心部はコンクリート舗装されていた。農場員の住宅を見せてもらったが、メタンガス発生装置が

あり、オンドルを使用する秋から春を除いては、炊事にメタンガスを利用しているとのことであった。自留地にはキュウリやナス、唐辛子が植えられており、家の横には家畜小屋があり、ウサギやイヌ、ブタを飼っていた。これらはすべて個人の収入になるとのことであった。協同農場では、粗放式養殖方法を用いた内水面養殖が実施されていた。用水路には、アヒルが数多く放流されており、タンパク源の確保に力が入られている様子であった。



写真5 泉三協同農場の一風景



写真6 泉三協同農場の用水路で見かけたアヒル

泉三協同農場を出発し、元山の松濤園ホテルで昼食を取った後、平壤に向かった。今回は工事中のトンネルを通らずに、峠道を通った。峠道は舗装されておらず、トンネルを通れば5分のところ、45分を所要した。非舗装道路ではあるが、それなりに手が入っていた。



写真7 平壤～元山高速道路に並行する国道の峠道



写真8 平壤326電線工場の捲取機（日本製）

#### 平壤市内での工場見学 - 326電線工場と船橋編織工場

今回の滞在中、平壤市内で2つの工場を見学する機会があった。最初に訪問したのは、平川区域にある「326電線工場」である。この工場は北朝鮮随一の電線工場であり、各種電線および通信ケーブルを生産している。韓国からの経済考察団も訪問するなど、モデル工場の要素の強い工場である。

工場内の設備は、写真8のように古いもの（1970年代）は日本製、1980年代は台湾製、1990年代以降は中国製の設備が多かった。冷却器や捲き取り機など、日本製の機械が現役で使われているラインも多かった。被覆電線の被覆部分は、プラスチックを国内で生産していないためか、中国の会社の名前が書かれた袋に入れられていた。モデル工場のせいか、美術大学の学生が工場内で設備を写生していた。

平壤市内ではあまり自転車を見かけなかったが、工場内には、自転車置き場が設けられており、かなりの数の自転車が駐車されていた。案内人に聞くと、平壤市内では自転車の運転に関する規定が厳しく、特に市内中心部では押して歩かなければならない区間が多いので、乗らない人が多いとのことだった。

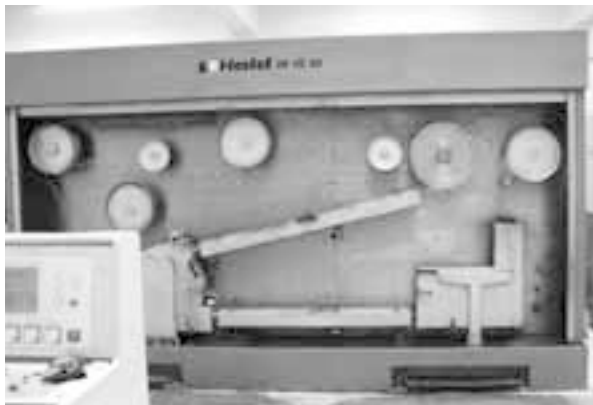


写真9 平壤326電線工場の設備



写真12 同織機の銘板（日本製）



写真10 平壤326電線工場の自転車置き場

この工場では、糸からメリヤス生地を織り、染色を施すものは施し、切断、縫製までを行っている。ランニングやアンダーシャツなどを生産している。工場内に掲げられていた日課表によると、この工場は、8時30分出勤、9時～12時30分まで午前中の作業、12時30分～13時30分まで昼食、13時30分～18時まで午後の作業、18時～18時30分まで一日の生産・財政総括、18時30分退勤というスケジュールであった。

次に訪問したのは、東平壤地区にある船橋編織工場であった。この工場は、平壤市民にメリヤス製の下着などを中心に供給するための軽工業工場として運営されているということであった。この工場の設備も古いもの（～1970年代後半）は日本製、それ以降のものは台湾製や中国製のものが多かった。メリヤスを織る織機は、日本製の設備が健在であった。



写真13 船橋編織工場の日課表



写真11 船橋編織工場の織機



写真14 同工場の国内向け縫製生産現場

実際に縫製の生産ラインを見せてもらった。国内向け生

産ラインも輸出向け生産ラインもともに整然と設備が並び、従業員がきびきびと縫製を行っていく。国内向け生産ラインは、何フロアかに分かれていた。従業員はフロアごとに同じシャツを着て作業をしている。輸出向け生産ラインが他と違うのは、生産を促すためか、音楽が流れていたことだった。



写真15 同工場の輸出向け委託加工縫製生産現場



写真16 同工場の職員表彰（労力革新者）

工場の中に、工場の歴史や生産品を展示している部屋があった。見学者に説明するための設備である。そこには、優秀職員（労力革新者）として各職場から選抜された人々が写真とともに紹介されていた。北朝鮮では、このような他の模範となる働きをした人々に対して、「政治道徳的刺激」を与え、それに必ず「物質的刺激」が伴うようにしているとの説明がなされている。1990年代に北朝鮮で流行した「口笛」という恋愛を歌った歌では、主人公の男性が「革新者」に選ばれ、その印の花束を好意を寄せる女性に見せれば、彼女の心をつかむことができるのではないか、という内容の歌詞があるが、各工場に掲示されている労力革新者の数は、それほど多くはなく、実際には、労力革新者になるためには相当の努力をしなければならないように感じた。その分、その名誉は大きく、各班やラインでの競争を通じて、努力を重ねているように感じた。

## 人民経済大学訪問

滞在中、平壤市にある人民経済大学を訪問する機会を得た。人民経済大学は、一般の大学とは異なり、国家機関に働く公務員の再教育を主に担当する教育機関である。教育を受けた人たちはすぐさま現場に投入されることとなる。そのため、実際の国家機関や企業の運営に即した教育を行っている。



写真17 人民経済大学の研究室の壁に掲げられた連合企業所管理運営の方法



写真18 同 計画機関体系と計画作成手続の方法

例えば、国営企業の支配人（社長）の研修であれば、教員が社長の席に座り、研修生が各部門の担当者の役を行い、経営のシミュレーションを行うような形での実習が行われるとのことであった。実際に、そのようなシミュレーションを行う教室があった。

また、企業運営のさまざまな内容についての研究室（教室）があり、そこで実践的な内容の講義が行われているとのことであったが、研究室の壁には、その研究室で教えられる内容を大まかに説明したパネルが設置されていた。写真17は、大型国営企業である連合企業所の運営方法についてのパネルであり、写真18は、国家計画を策定する上での関連機関と計画策定の手続について解説したものである。

改善しつつある平壤市民の生活

今回の訪問で、平壤市民の生活が改善しつつあることをいくつかの場面から感じることができた。

まず、写真19に見られるように、アイスクャンデーの種類が増え（値段は150～300ウォン。実勢レートで約6～12円）味も向上してきた。乳脂肪の強い味ではなく、脱脂粉乳と卵を混ぜたものにデンプンをいれた昔懐かしい味のミルク味やココア味、ミルク味のものにはたい粉を混ぜたようなもの、リンゴ味の氷菓などさまざまな味のものがある。市内の簡易売店でこれらのアイスクャンデーを味わうことができる。食べている人もかなりの数見ることができる。子どもだけでなく、大人も好きな人が多いようである。



写真19 種類が増えてきたアイスクャンデー



写真20 モランボン公園で踊る人々

写真20は、祝日にモランボン公園でピクニックに出かけ、仲間とともに踊っている人々である。豪華なお弁当を広げて宴会をしているグループもあれば、たき火をして、焼き肉パーティーをするグループもいる。デートのカップルもちらほらいたが、グループで来ている人たちが多かった。あるグループの宴会に入れてもらい、焼酎や天ぷら、海苔巻きなどをごちそうになった。会社の同僚たちが各家の自慢の料理を持ち寄ってピクニックをしているとのこと

であった。2002年9月に訪問した際も、旧盆の休日にピクニックに来ている人たちがいたが、その時と比べると料理の内容は格段に向上し、酒類もいろいろと飲まれていた。



写真21 アパートに配達されたプロパンガスボンベ



写真22 食堂の経理にもコンピュータが活躍

写真21はアパートに配達されたプロパンガスボンベである。最近、平壤市内の住宅地域には、プロパンガスの販売を受け付ける窓口が多く見られるようになった。北朝鮮ではプロパンガスを生産していないので、中国からの輸入品であると考えられる。モデル農場では、メタンガス発生装置からのガスを利用していたが、都市ではそうはいかない。2004年に北朝鮮の人にインタビューしたときには、灯油コンロとガスが半々くらいで使われているとのことであったが、プロパンガスボンベをまとめて見たのは今回が初めてであった。

写真22は、筆者が今回の訪朝で泊まったホテルの食堂の受付兼レジである。コンピュータが置かれ、在庫管理や経理処理をコンピュータを利用して行っている。このホテルでは、売店の販売管理にもコンピュータを使っているようであった。このようにコンピュータが商店や食堂などで広く使われ出したのが、ここ3～4年の新たな動きである。これまでに『ERINA REPORT』誌上にも何度か科学技術や情報技術を重視する論文が掲載されているが、それが単

なるスローガンではなく、現場における実践がなされていることがわかる。

#### 地方人民会議（道および郡レベル）選挙

7月29日は、4年に1度の地方人民会議（議会）の選挙であった。今回の選挙は道（直轄市）と郡（市・区域）の2つのレベルの選挙が同時に行われた。道は日本の都道府県に相当する北朝鮮の地方区分であり、平壤市は直轄市となっているので、道と同じレベルとなる。また、郡（市・直轄市の区域）は道の一級下の行政単位である。平壤市の場合、市内の各区域（区）が郡と同じレベルとなる。

選挙当日の朝、筆者は平川区域にある平壤326電線工場に設置されている投票所の見学に行った。投票所は市内各地に設置されていたが、外国人に見せる投票所は比較的大型の工場等に併設されていて、従業員のクラブ活動などにより華やかな雰囲気を出しているようであった。当日の朝鮮中央テレビのニュースでは、平壤326電線工場の他、人民経済大学などが紹介されていた。

北朝鮮の選挙は、党や社会の選考を経て立候補した候補に対して、信任投票を行うという形が普通である。もちろん、法的には複数の候補者を立てることができるようになっているが、複数の候補者が立っている選挙区は今回の地方人民会議の選挙では聞くことがなかった。党や社会の選考を経ているため、選挙権を持つ人は全員投票することが権利であるとともに、社会に対する責任であると考えられているようだ。そして、全員が賛成（信任）投票することが求められている。



写真23 選挙を祝う雰囲気を盛り上げる工場労働者たちのクラブ活動



写真24 地方人民会議代議員候補者の公告



写真25 地方人民会議選挙人の公告



写真26 地方人民会議の投票用紙（左が各区域、右が平壤市のもの）

投票方式は日本とは少し違う。日本では、投票用紙に票を投じたい候補者名を記入するが、北朝鮮では投票用紙に候補者の名前があらかじめ印刷されており、賛成（信任）する場合には、そのまま票を投票箱に入れればよい。法的

には、もし反対（不信任）の場合には、写真27の投票箱の横に置かれている鉛筆で候補者の名前に×をつけることになっている。しかし、当日の朝鮮中央テレビでは、投票した人々の全員が賛成したと報道されていた。



写真27 地方人民会議選挙の投票箱

このような選挙の方式は、日本の方式に慣れた我々から見れば、奇妙に見える。しかし、中国でも1979年の選挙法の改正までは、1つの議席に候補者が1名しかいない「等额選挙」であり、1つの議席に複数の候補者がいる「差額選挙」は比較的新しい制度である。国民の選択権を十分に保障する上では、複数候補者を立てる方式にすることが望ましいのが、北朝鮮の場合、米国との対立など厳しい国際情勢などから、社会の安定を確保することを重視するため、そこまで手が回らないのが現実なのであろう。

#### 白頭山訪問

今回の訪問の後半、7月30日から8月1日まで、白頭山を訪問する機会があった。白頭山を訪問する場合、一般的には列車を利用するが、外国人の場合は時間短縮と列車ダイヤの不確実性から飛行機を利用するのが基本となっている。

7月30日の朝、順安飛行場からチャーター機に便乗して三池淵空港に向かう。飛行機はプロペラのアントノフ24型機のため、速度が遅く、1時間45分ほどかかった。三池淵空港は晴れ、平壤とは違い涼しく空気が澄んでいた。白頭山は天気が変わりやすいので、宿舎のペグボンホテルにチェックイン後食事をし、すぐに白頭山に向かう。ホテルから白頭山麓までは2時間弱であった。そこから、白頭山の頂上に向かって急な山道を登る。ケーブルカーが建設されているが、電力事情があまりよくないので、車で登るのが今は基本になっているそうだ。



写真28 三池淵空港着陸の前に見た地上。南向きの斜面は畑になっている



写真29 筆者が乗ったアントノフ24型機



写真30 白頭山天池

山麓から40分ほどでケーブルカーの頂上駅に着く。標高は2,500メートルを超えており、肌寒い。白頭山天池を望む丘の上だ。天池の中を中国と北朝鮮の国境線が通っている。写真30の奥の方が中国で、右上の方に流れていっているのが松花江だそうだ。

ケーブルカーの頂上駅から最高峰の將軍峰までは、車で行くことができないので、徒歩となる。標高差は150メートルほどだろうか。空気が少し薄い中を足場の悪い石の多い稜線づたいに歩いていく。30分ほどで將軍峰に到着した。南側の斜面を見ると、白頭山麓の原生林が見渡せた。